

「英語教育改善プラン」に基づいた指導と評価の一体化に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～新潟市～

課題

- ・ 当市の授業フレームワークを核にした外国語活動、外国語の授業づくりについて、小・中・高等学校の連携が図られていない。
- ・ CAN-DOリストの活用の仕方について共有化が図られていない。

具体的な対策

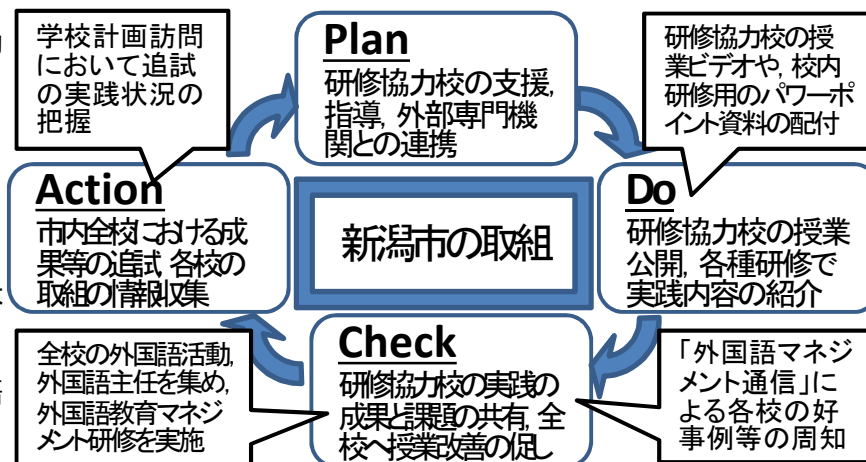
- ・ 市教委指導主事が、指導案の作成段階から積極的に関わり、外部専門機関と学校をつなぎ、成果と課題を市小研、中教研等の研修会で紹介したり、外国語教育マネジメント通信を配信するなどし、広く周知する。

具体的な取組内容

- ① 新潟市の授業フレームワークと逆向き設計の考え方を活用した単元構想の提案
単元終末における目指す姿を児童・生徒と共有し、目的意識をもたせた上で(単元型)、どのような知識・技能(目標言語材料)を習得する必要があるか(技能習得型)について学級で共有化することで学習に見通しをもち、必要感をもって各活動に取り組むことができる。
- ② 公開授業や授業実践から見た好事例の共有化
研修協力校の実践の成果をビデオやパワーポイント等で配付することを通して、各校の授業づくりに役立ててもらった。学校計画訪問の際に、成果の周知具合を確認し、さらに、別の研修会等で情報共有を行った。また、外国語教育マネジメント通信を配信し、すべての教員に情報共有を図っている。
※ 新潟市教委では、市内すべての学校を2年に1回訪問し、全学級の授業を参観し、その後分科会に分かれ、一人一人指導する機会を設けている。
- ③ CAN-DOリストの活用の方途に係る研修
新潟市の課題であるCAN-DOリストの活用における課題を克服すべく、新潟大学教育学部松沢伸二教授の指導の基、主に中・高等学校の研修協力校においてCAN-DOリストの改善を図った。五十嵐中学校では、資質・能力の1つである「学びに向かう力・人間性等」における記述文も明記し、公表した。また、日々の授業の学びの履歴としてProgress Cardも作成し、CAN-DOリストと連動して活用することで、生徒に、自己の学びをモニタリングさせた。

成果と課題

- 小学校の授業づくりに関する指導、連携
研修協力校で年間6回の授業公開を行い、指導案作成の段階から指導に関わったことで、成果と課題を詳細に把握することができ、外部専門機関と連携して毎回改善を図ることができ、その成果を市内に広めた。
- 授業フレームワークの活用による小中高連携
逆向き設計で単元をデザインすることで、必要な言語材料を明らかにし、活動を有機的に関連付けることができた。
- CAN-DOリストの活用の方途について
新潟市の課題であるCAN-DOリストの活用について、新潟大学松沢伸二教授の指導を受け、協力校の取組内容を全市に周知した。今後各校で実態を踏まえ、取り組み内容を共有化していく。
- 授業評価について
11月実施の「新潟市学習意識調査」で「英語の授業がわかりますか」という質問に対して、肯定的評価をした割合は、75.7%だった。授業公開した学級では肯定的な評価は100%だった。
- △ 教員の英語力について
研修協力校の生徒の英検受検者数は昨年度比2倍だった。また、教員の英語能力に関する外部試験の受検者数も増加した。しかしながら、中学校教員のB2レベル以上に該当する教員数が改善しなかった。



平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～新潟市立庄瀬小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

児童の中には、「もっと英語を話したり聞いたりしてコミュニケーションを図りたい」という前向きな思いがある一方、英語を話したり聞いたりすることに不安感を抱いている児童もいる。「主体的な学びのための単元構成の工夫」と「対話前のデモンストレーションや対話の場の工夫」を行うことで、目的意識が醸成され、自信をもってコミュニケーションを図る児童が増えると考えた。

具体の取組の内容

以下の2点を具体的な手立てとして、年間6回の授業研究を行い、成果と課題を明らかにした。

① 主体的な学びのために

- ・新潟市教委の授業フレームワーク「単元型」と「技能取得型」を併用した単元構成(単元の初発にゴールの姿を共有し、そのために必要な技能を学級で共有し、習得していく単元構成)
- ・2段階のゴール設定、ビデオレターをパフォーマンス評価として活用、階段式のふり返りカードの活用
- ・新潟大学松沢教授の指導による逆向き設計による単元構成
- ・映像やデジタル教材の効果的な活用(繰り返し、段階的に活用)

② 対話的で深い学びのために

- ・デモンストレーションの工夫(教師-児童→児童-児童-全体:デモンストレーションに児童を巻き込む)
- ・対話の場の工夫(相手の答えを推測した上での言語活動・イラストや写真など具体物を見せながら、夏休みなどの思い出について語る言語活動)

外国語活動ふり返りカード Unit7 What do you want? Name		得意になったこと	楽しかったこと
1. 1人1枚のカードで自分の好きなものを描いて発表する。	発表の準備	発表の準備	発表の準備
2. 発表の様子を録音し、振り返りシートで振り返る。	発表の様子を録音	発表の様子を録音	発表の様子を録音
3. 発表の様子を録音し、振り返りシートで振り返る。	発表の様子を録音	発表の様子を録音	発表の様子を録音
4. 発表の様子を録音し、振り返りシートで振り返る。	発表の様子を録音	発表の様子を録音	発表の様子を録音
5. 発表の様子を録音し、振り返りシートで振り返る。	発表の様子を録音	発表の様子を録音	発表の様子を録音
6. 発表の様子を録音し、振り返りシートで振り返る。	発表の様子を録音	発表の様子を録音	発表の様子を録音

成果①

- ・単元のゴールを学級で共有し、「そのために何ができるとよいか」を話し合うことにより、活動の目的や場面、状況、相手意識が明確になり、児童全員がゴールの姿をイメージし、意欲的に言語活動に取り組むことができた。
- ・デジタル教材や自作のALTの映像は、児童の活動意欲を高め、よいモデルとして、有効に活用することができた。
- ・目標言語材料を繰り返し活用したり、段階的に活用したりすることは、児童の興味・関心を高め、習得すべき表現を教師から教えられるのではなく、主体的に推測させ、見付けさせることができ、効果的であった。

成果②

- ・対話の前のデモンストレーションを行うことで、本時のねらいに沿って自分たちがどのように対話をすればいいかについて主体的に考えさせることができ、効果的だった。
- ・ALTや児童を巻きこんだデモンストレーションは活動への期待感や意欲を高めることに効果的であった。
- ・単元のゴールや本時で目指す児童の姿から逆向き設計で対話の場を工夫したことにより、すべての活動が有機的につながり、ねらいに迫る児童の姿を多く見ることができた。
- ・対話をする前に相手の答えを推測させることで、対話はより活性化した。

今後の課題・方向性

- ・全ての単元で「目的・場面・状況・相手意識」を明確にしたゴールを設定することは難しい。「What do you have on Monday? 夢の時間割をつくろう」では、時間割を英語で誰かに伝える必要感のあるゴール設定が難しく、習得させる表現も多かったため、2段階のゴールを設定をした。(①ALTにクラスの時間割を伝えよう②夢のための時間割を友達に伝えよう)
- ・対話場面では、児童間で教え合ったりサポートをし合ったりして慣れ親しみはするが、発音等の表現の質が向上することは難しい。(対話場面にALTも入ってもらうことで表現の質の向上につながる)

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～新潟市立五十嵐中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

5月初旬に実施した全校生徒対象の英語学習アンケートで、「英語が得意」と回答した生徒は約半数であった。特にスピーキングの技能を高めたいという生徒が多かった。そこで、スピーキングのやりとりの指導を通して自信を持たせ、「英語が得意」と答える生徒を70%まで高めるために、以下の3つに取り組んだ。

具体の取組の内容

●五十嵐中学校英語科としての3つの取組

1, Can Do リスト改訂及びProgress Card(振り返りカード)の作成(3年間分統一した書式で作成)・使用

★Can Do/To Do リストに「学び向かう力・人間性等」を付け加え、「英語の授業を通して協働する力を高めよう」という指導を行った。本校HPに公開。

★生徒が学習の積み上がりを実感できるように、毎時間Progress Cardにその日の学びを記入させた。

2, 1 Minute Talkに全クラスで取り組む。会話を続ける・深めるための指導法を教員間で共有する。

★月に1回、ALTと1 minute talkをする機会を作った。「言えない」、「英語で表現したい」という気持ちを起こさせてから、表現の提示をするようにした。

3, ジャンル準拠指導(松沢, 2006)をもとに、speaking, writingの指導法を共有し、実践する。

★場面・状況・目的の設定→モデル分析→評価基準の作成→共同組立→自力組立という指導過程を英語科教員で共有し、指導にあたった。公開授業でその一部を公開した。

●11月6日、1年生1クラスにて公開授業を実施(指導者:新潟大学松沢教授、市教委指導主事2名、参加者:新潟市内小中高教員43名)



成果①

- ・10月実施の英語学習アンケートで、「英語が得意」と答えた生徒は63%であり、半年間で約10ポイント上昇した。
- ・11月実施の新潟市学習意識調査で「英語の授業がわかりますか」という質問に対して、肯定的評価をした割合は、新潟市75.7%、五十嵐中学校全体78.3%、公開授業をしたクラス100%であった

成果②

- ・「Progress Cardの効果は非常に大きい。生徒の学びの拠り所になっている。」本校英語科教員
- ・「英語の授業を通して教えることも勉強なのだを知った。」「Reed先生との1 minute talkが全く怖くなくなった。間違えても言い直せば会話は続くと思うし、自信がついてきた。」Progress Cardより
- ・「学級全体に間違っても大丈夫だという雰囲気があり、活発な発言・議論ができるクラスに成長した。」公開授業クラスの他教科担任
- ・「中1でこんなに自然に会話を続けられることに驚いた。きっと継続した1 minute talkの取り組みの成果だろうと思う。」授業参観者
- ・「半年間で生徒の発話量は格段に増えた。会話の構成(流れ・展開)も自然になった。」本校ALT
- ・「学校教育ビジョンをふまえてCAN DO リストを作ってくれた。英語の授業が本校の目指す関わり合いに寄与している。」管理職

今後の課題・方向性

●3つの取組に関する課題

- 1, Can Do リスト内の「学びに向かう力・人間性等」の目標の精査が必要である。また、その評価方法を英語科で検討し、来年度の提案としたい。
- 2, 1 minute talkの指導において、学年に応じ、関心のある事柄から日常的な話題、3年生では、社会的な話題を扱うなど、内容的にレベルを上げていく。
- 3, 他学年、他技能での実施を検討する。
ジャンル準拠指導が英語科内に浸透したので、今後は他技能や技能統合型学習での指導可能性を模索する。

●その他の課題

2回目のアンケートでも「英語が苦手」と答えた生徒は1割程度いた。このような生徒への支援も学校全体で考えていく必要がある。

平成28～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～新潟市立万代高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・現状の課題 4技能5領域の指導・評価のバランス、指導・評価方法の確立
- ・課題解決の手立て 指導と評価の改善(特にスピーキング(発表・やりとり)のパフォーマンステスト)

具体の取組の内容

公開授業「20世紀回顧展」のガイドになったつもりで自然な間や身振りを交えたレシテーションを練習する

- ・「発表」はコミュニケーション英語Ⅰ、「やりとり」は英語表現Ⅰでパフォーマンステスト実施(双方、学期に1度)。
- ・2学期の「発表」は「レシテーション」(スピーチやプレゼンテーションにつなげる足がかり)。
- ・新潟市内の小・中学校の連携校の実践を参考に、授業のゴールを明確に設定し、生徒と共有した。
- ・評価に向けての練習を公開授業に設定した。自宅でできる練習法を体験させ、自主的に取り組ませることが狙い。
- ・評価は「上手かどうか」ではなく、「できたかどうか」を重視。より客観的でゴールが設定しやすい。
- ・ペア活動・グループ活動・相互評価・自己評価を組み合わせ、活動する時間を増やす。

成果①

- ・進研模試1年11月英語
事業実施前(2009～2015)
偏差値平均 46.5
事業実施後(2016～2018)
偏差値平均 48.8
- ・GTECスピーキング初実施
(18年No.1A) 平均グレード3
(GTEC BASIC 34回B
リーディング2 リスニング2
ライティング3)

成果②

教員から見た生徒の変容
・授業での英語活動が増えペア活動やグループ活動への参加が活発になったようだ。

管理職から見た職員の変容
・日常的に情報交換の機会を設け指導内容・方法等について足並みをそろえる姿がある。評価についてもよく議論している。

今後の課題・方向性

今回改善が見られなかった課題
・授業時間でパフォーマンステストが終わらない。
(→タスクの分量・実施方法の再考)

取り組みを通して明らかになった課題
・小中学校からの参加者から、「暗唱とアイコンタクト、身振り、プロソディすべては盛り込みすぎではないか」との指摘。
(→小中高の意識の連携が必要では?)